

ユニバーサルデザイン・レビュー

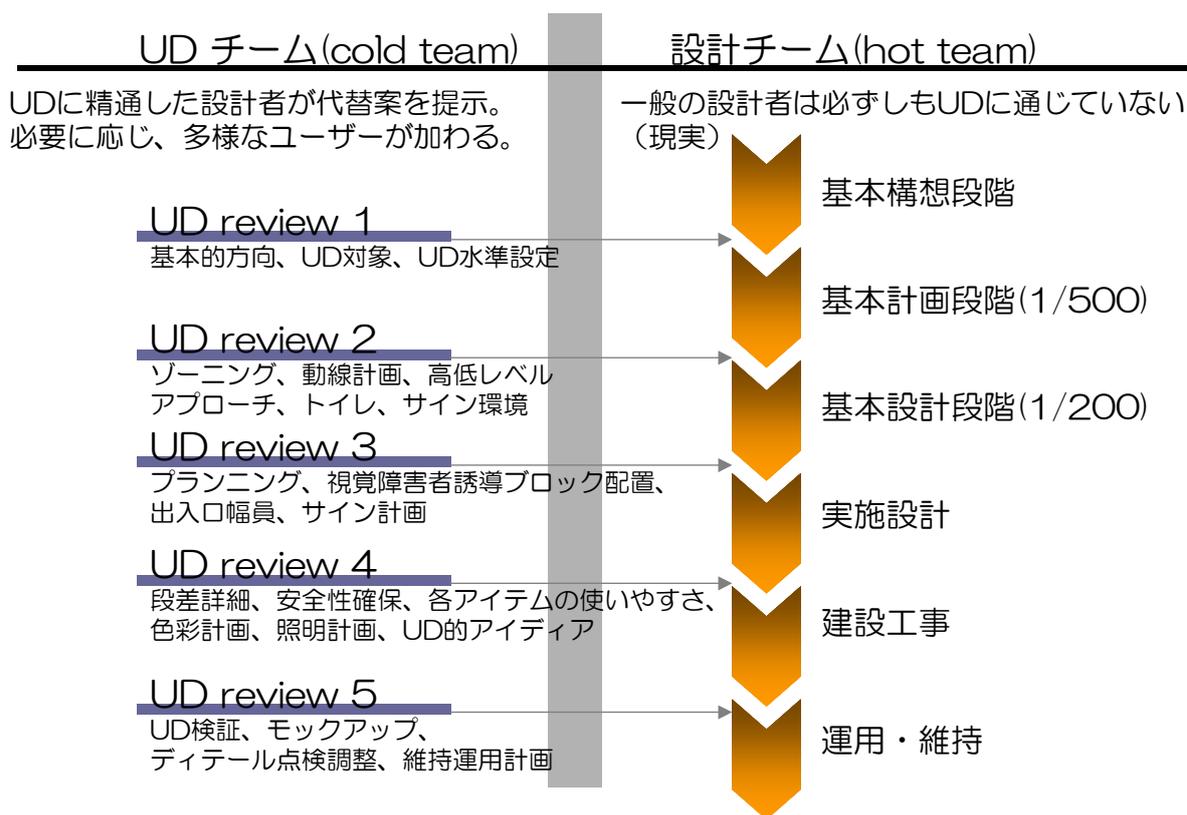
●建築設計にユニバーサルデザインを組み込む画期的な手法

●ユニバーサルデザイン・レビューとは、建築プロジェクトにおける基本構想・基本計画・基本設計(1/500)・基本設計(1/200)・実施設計・施工の各段階において、ユニバーサルデザインの視点からの設計の見直し(レビュー)を行うことを意味しています。発注者がプロジェクトを実施するにあたって認識すべきことのひとつは、建築設計者やデザイナーは必ずしもユニバーサルデザインに通じていないという事実です。プロジェクトをユニバーサルデザインにかなったものとするには、新たな管理手法が必要となります。これは設計委託後に設計者に対して要請するのではなく、委託前に設計の与条件として設計プロセスに組み込むべきものです。その方が発注者・設計者ともに手戻りがなく、無駄がありません。

●注意すべきは、バリアフリー新法・福祉まちづくり条例などの法規制とユニバーサルデザインの区別です。前者は法律により定められた義務(あるいは努力義務)であり、これを怠ると違法となります。これは遵守事項ですが、設計者にとっては最低限守っていけばよいという認識となりがちです。一方、ユニバーサルデザインは、法的義務を超えたクオリティの創造を目指しています。その達成は、他との比較や主観的な部分に追うことが多いのですが、完結することはありません。何故なら、達成によってもたらされる満足度が次の期待値を生み続けるからです。評価と改善を繰り返すスパイラルなプロセスが、ユニバーサルデザイン・レビュー(以下、UDレビュー)の特徴です。

●さて、法的基準を遵守すると言った明確な指標がある場合は、チェックリスト等での評価が容易ですが、ユニバーサルデザインのように「より多くの方がより使いやすい」といった漠とした目標は、チェックリストであらかじめ着地点を定めることが困難です。したがって、「目標地点をあらかじめ定める」のではなく、「設計プロセスにおいて、よりよい方向へと改善し続けるための仕組み」が必要です。このために考案されたのがUDレビューです。

ユニバーサルデザインは、計画当初から建設工事までの5段階で、ビル設計チームとの対話形式で進めていくシンプルな手法です。計画当初から始めることで、設計の手戻りや無用なコストアップを回避します。



●ユーザー関係団体へのヒヤリングと比較した、UDレビューの長所

- ①設計チームとユーザーの対立構造を排しやすい。また「アリバイ的な対応」を排しやすい。
- ②UD（つかい手視点）と設計（つくり手視点）に通じたUDチームは設計チームと「同じ土俵」で専門的・建設的な検討することが可能。
- ③代替案の提示によって、解決法がより高度で現実的なものとなる。
- ④設計初期から関わるため、手戻りが少なく効果も大きい。
- ⑤結果として、効率的で効果的なユニバーサルデザイン環境の実現が可能となる。

●全ての建築設計者がUDに通じている訳ではない。

施設ユーザーからよく聞かれる不満のひとつとして、建築設計者は真にユーザーのユーザビリティへのニーズを捉えていないのではないかと、言われます。なぜ、そうしたことが起こるのでしょうか。建築設計者はクライアントの要望、建築関連法規、コスト管理、建設方法の選択、文化的コンテキストの読み込み、周辺環境との整合、環境問題、デザイン、防災、多くの関係者との意思疎通など、様々な「条件」を統合してひとつの建築をつくりあげる極めて多忙な職種です。

設計者へのインタビューから言えることの1つは、設計者は設計条件を2つに分けて考える傾向があります。1つは、最低限守らなければならないもの（守っておけばよいもの）で、法規・コスト・安全性など。もう1つは、設計者が強い関心を持ち、より良いものへと追求していくもので、デザイン、技術的関心事項などであることが多いと言って良いでしょう。

これまでバリアフリー等のユーザビリティへの対応は、一部の設計者を除いて、「守っておけばよいもの」に属すケースが多かったのではないのでしょうか。より良い計画を目指すとするれば、これから脱却し、「より良いものへと追求していく」ことが肝要です。「より良いものへと追求していく」ことは、プロセス重視のUD的アプローチです。UDチームの存在により、設計プロセスの中で、設計者の関心とデザインの解決への力量を引き出す「仕組み」の1つが、UDレビューと位置づけられます。

2

ユニバーサルデザイン・レビューは、設計チームの設計案に対して、UDチームがUDの視点から、より使いやすい代替案を大まかなコストの増減とともに提示します。設計チームは、その提案の採用の可否について、不採用の場合はその理由とともにUDチームに返します。このプロセスを、各段階で発注者に報告します。こうしたやりとりを、設計・建設工事プロセスの5段階で行います。

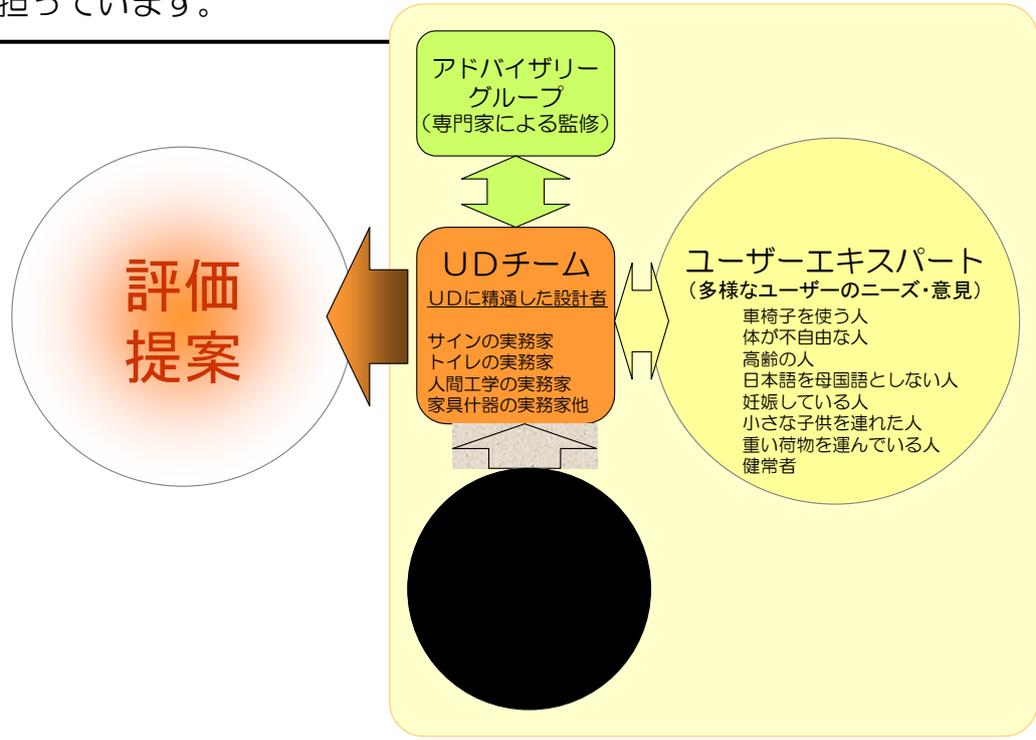
UDレビュー記録シート例（医療系施設のケース）

〇〇プロジェクト ユニバーサルデザインレビュー4（実施設計段階）		2003.06.18
		（UDシート作成担当 UDチーム：□□）
・設計チーム：〇〇（設計チーフ）、〇〇、〇〇、〇〇 ・UDチーム：□□		
特記：NO12, 13, 14, 19については検討結果を再度打ち合わせ下さい。		
	UDチーム代替案	設計チーム回答
1	電話ボックス（携帯用も含む）車椅子利用者への配慮 →スペース 2m×2m、電話代の高さ H=700mm など確保。病棟階は6から10階全フロアにブース形式を設けないでも例えば6階のみ、後の6から10階はオープン形式でも良いのでは？ 車椅子、点滴利用者にとっては電話台の幅が大切で1100mmは欲しい。（コスト増減なし）	6/18→1階に車椅子用 TEL ボックス有り、各階に公衆電話が配備されるか未定。どの位配備されるか決定後、例えば配備されない階は携帯電話用ボックスを広げるなど、その時点で再調整。（コスト増減なし）
2	車庫から本館への庇有効高さ →H=4000mm を 3000mm。消防車が通るといって一般の道路が走れるか？また東側通路から入れないか？（コスト増減なし）	6/18→了解。
3	病室の建具高さ、 →H=2100mm をたれ壁を設け 1800mm とし使い易くしたい。（コスト増約〇〇円）	6/18→再検討。
4	手すりのシングル、ダブルの整理 →病棟の手すりはシングル、あとは全て上下ダブルの手すり付き（コスト増約〇〇円）	6/18→原則、手すりはシングル。落下防止箇所の手すりは別途、考慮。
5	ガラス方立ての手すり →破損などクレームが多いので枠付き手すり（コスト増約〇〇円）	6/18→破損しないディテールとし、飛散防止のフィルムを貼る。
6	洗面台バックの奥行き →1階、2階女子便所 1300mm、3階は男子便所の2100mm に対し女子便所の1300～1400mm と狭い。4通りの壁を若干移動各階の女子便所の洗面台バックの奥行きを1500mm 確保（コスト増約〇〇円）	6/18→奥行きを1400mm としたい。
7	車椅子利用者への洗面台 →車椅子利用者の足がはいるよう引き寸法 300mm を確保（コスト増減なし）	6/18→了解。

*実際にはユニバーサルデザイン・レビュー4（実施設計段階）では、50-100項目ほどの提案をおこなう。

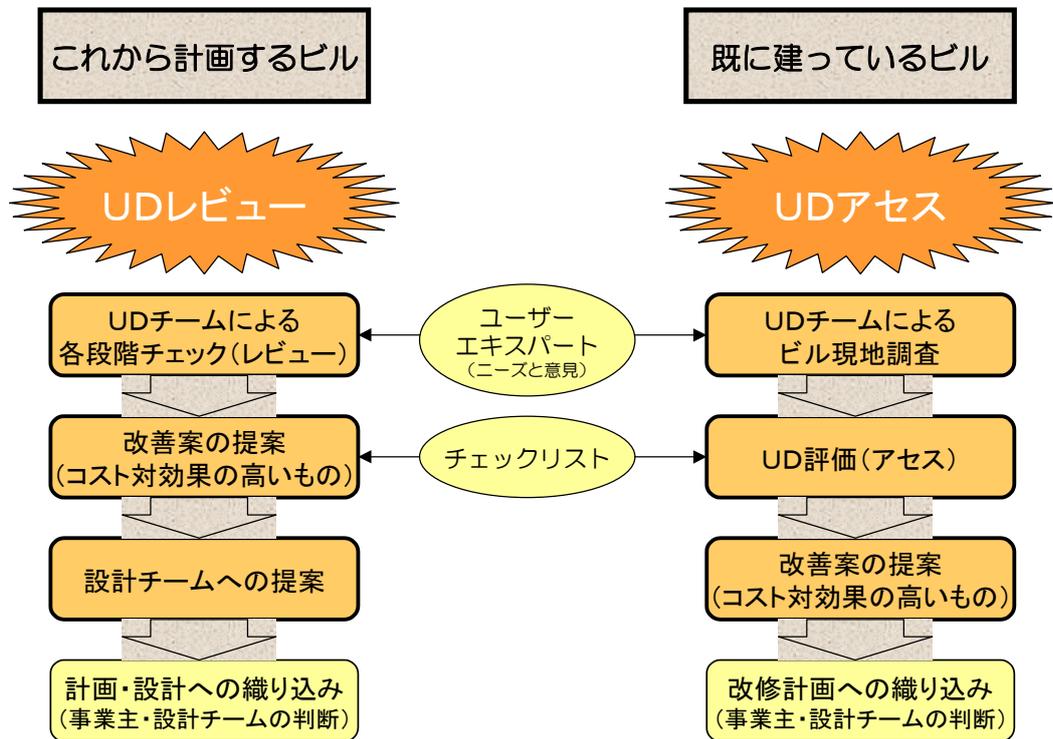
3

UDチームの仕事は、UDに精通した設計者による図面チェックが中心です。必要に応じて、サイン・トイレ・人間工学・家具什器などの実務者と協同します。また、大学関係者など専門家からなる「アドバイザリーグループ」への意見照会を必要に応じ行います。UDチームは、障害のある人を含む多様なユーザーの調査チームである「ユーザーエキスパート」の意見とニーズを、設計チームに提案する翻訳者の役割をも担っています。



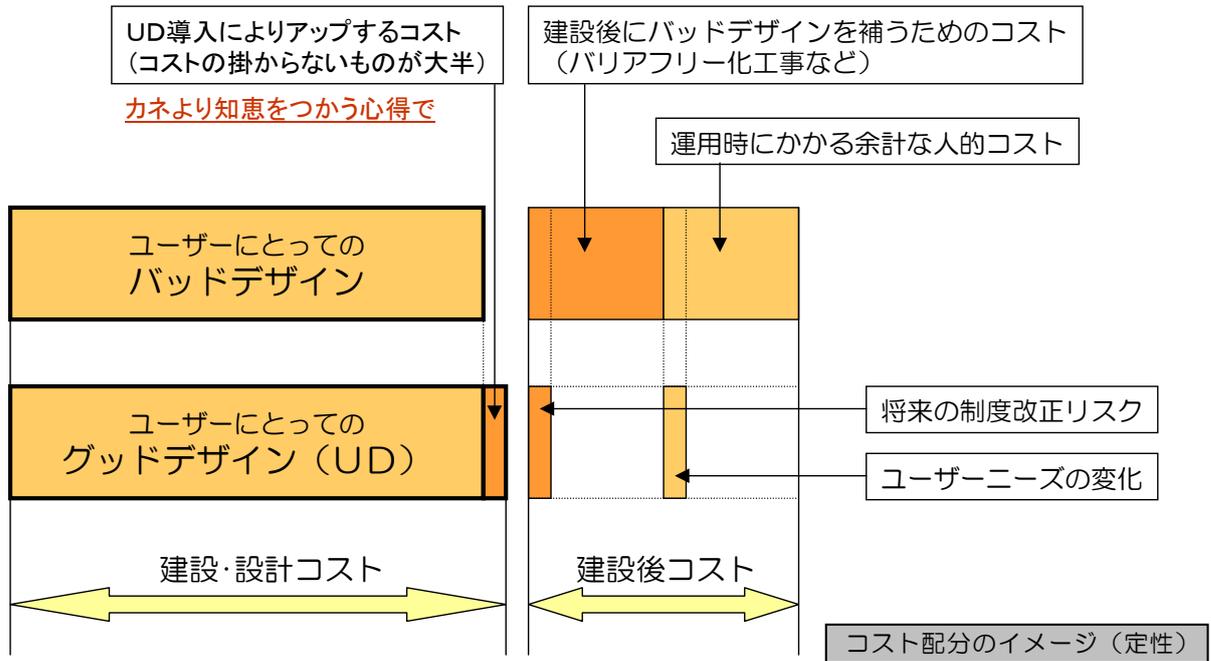
4

新築ビルだけでなく、既存ビルに対しても、UD調査・改善提案を行うための「UDアセス（評価）」を行います。資産価値、ワーカー満足度の高い効果的なりリニューアルにつなげることができます。



5

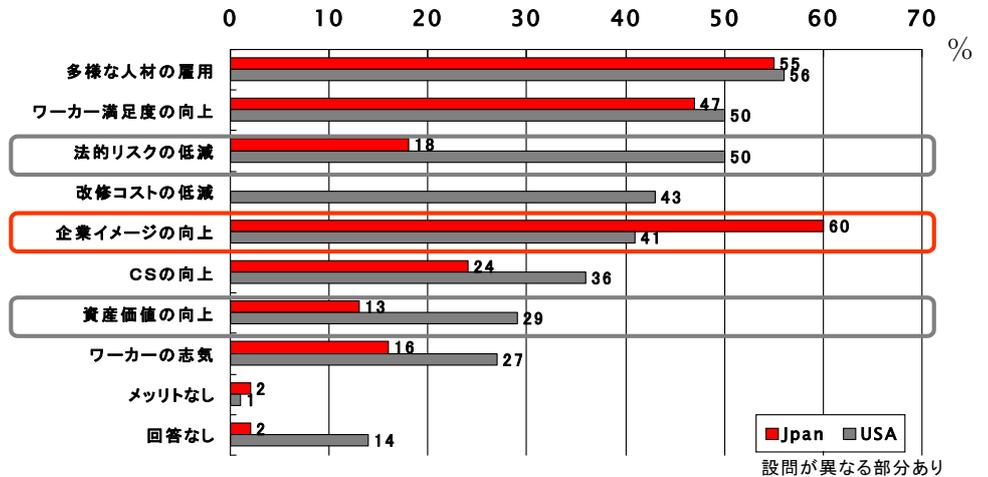
ユニバーサルデザインは、建設後の改修などの事後的対処と比較すると、ほとんどコストアップなしに実現することができます。そのためにも、UDレビューによる、ビル計画当初からのUD視点の織り込みが必要です。



6

ユニバーサルデザインの先進国である米国では、我が国と比較して、ユニバーサルデザイン導入が、建設コストアップや面積効率低下を招くという懸念は小さいという企業調査結果が出ています。(施設マネージャに対する日米調査: JFMA 2003-04)

①UD導入のメリット (日米調査 2003-4)



②UD導入のデメリット (日米調査 2003-4)

